

インタビュー

貨幣鑑定家の「眼」

——川口晴弘氏に訊く——

川口 晴弘

日本近代銀貨研究会統括幹事

インタビュー・小田 忠

大阪商業大学商業史博物館 学芸員

はじめに

小田 江戸時代の幣制が複雑であったのは、金貨・銀貨・銭貨が併存し、量目や品位の違いが混迷を深めました。釣銭で言えば、銀貨で受け取れば、釣銭は銀貨と小割計算をした銭（その日の相場で釣銭を計算）を渡しました。「天保通宝」は密鑄により、各藩がこぞって鑄造した。その原因は、鑄造技術が稚拙であったことと、一文銭七枚を鑄潰せば天保通宝一枚が入るという事実。さらに幕末の金貨流失問題においてもハリスやオールコックが日本の幣制を知らなかった、そのため錯覚から生じた事実も見逃すわけにはいきません。

本日は、川口さんに来ていただきまして、現在から江戸時代までの貨幣の実態をテーマにして、不可解な問題についても考えてみたいと思います。最初に、貨幣の鑑定についてお話を伺いしたいと思います。川口さんよろしくお願いします。

一．貨幣の鑑定

川口 はい、よろしくお願いたします。

小田 貨幣の鑑定につきまして、見所、勘所があると思いますが、川

口さんも見所、勘所をお持ちだと思えます。どのような点を基準に見ておられるのでしょうか。

川口 非常に難しい質問です。貨幣と言いましても、日本のお金で言うと同開珎から始まる皇朝十二文銭、江戸時代にかけての小判、大判、豆板銀、丁銀、近代に入りまして金貨があり、銀貨もあります。そのように、非常に分野が広いのですけれども、その中であらゆる分野に対して偽物があります。非常に多いです。値段の高いものに多いです。ただ、最近は安いものでも千円、二千円で売っているような安いものでも偽物があります。安いから偽物はないだろうという感覚では非常に難しいと思います。

最初に、皇朝銭、皇朝十二文銭、和銅から始まるお金ですけれども、これは非常に難しいです。というのは、もともと関西のお金ですが、我々の業界でも関東の考え方と関西の考え方は違います。関西で我々の業界、収集会で本物と言っても、我々が所属している貨幣商協同組合の鑑定委員会では通らない場合もあります。真贋が分かれまです。それは非常に難しい問題です。ただ、我々が見るのは、やはり図案の鮮明さです。写しという型に嵌込んだものは、図案がすつきりしていない。それは江戸時代の貨幣でも丁銀・豆板銀などでもそうです。

小田 そうですか。先ほど少しお話が出ました安いお金ですが、例えば三百円、千円ぐらいで売っています。あるいは製造しているところでは、「おもちゃ」として製造しているのですか。

川口 先程言ったのはそういう意味ではなく、例えば、明治の一円銀貨、一円銀貨は、年号によって非常に高いものがあります。特に有名なものは明治八年、だいたい七十〜八十万から、状態のいいものなら二百〜三百万します。それから、貿易銀。それも、やはり二十〜三十万します。そういうものについては、今まで海外から、台湾あたりで偽物を作って国内に持ち込んで来ていました。それは、我々の業界でも、これは非常に偽物が多い物だということでも対処してきました。シークレットマークの特徴を頭に入れて、面の極印がちゃんと打たれているかどうかで対処してきましたけれども、昨今多いのは、今までになかったものです。

普通の年号、例えば何十万するものではなくて、一万円ぐらいで売っているもの、今まで、そういうものに偽物はなかったのです。それが、最近特にインターネットの世界に入って来まして、インターネットオークションというものが最近盛んになっているのですけれども、そこに出品されている品物、特に一円銀貨は、まず九十何パーセント偽物です。

それは、去年我々の業界に、そこで買われたお客さんが順次コレクションされたわけです。年号がある程度揃ったので、東京のある業者さんに「これはどうか」と鑑定依頼をしました。その業者さんも分かりますに、何とも言えないという感じでした。ちよつと嫌な気がしたのでしよう、それで我々の日本近代銀貨研究会という組織の中でも突き詰めた分野の収集家団体に持ち込まれまして、見ましたところ、全部



川口晴弘氏 プロフィール

昭和四十七年 早稲田大学第一法学部卒業、昭和六十年 スタンプコイン・カワグチ創設
 同年 日本貨幣商協同組合 日本郵便切手協同組合加盟、平成二年 日本貨幣商協同組合 理事就任、平成十三年 日本貨幣商協同組合 副理事長就任、平成十六年 日本貨幣商協同組合 相談役就任、平成十八年 日本貨幣商協同組合 相談役辞任、現在にいたる。

同じ特徴を持っていました。貨幣が、年号が違うのに同じ特徴を持っているということはまず考えられません。「これは同じ型だ」ということで、偽物の判断を示されました。

ただ、もし一枚、二枚、我々の店頭に売りに来られていたらどうだったか。たぶん買うでしょう。そこまで精巧でした。それが、普通の年号で状態がきれいな、未使用とかではなく普通に使われた状態のもので作っているわけです。だから非常に怖いのです。

小田 ということは、かなり精巧に作られているということですね。

川口 精巧に作っています。近代銀貨研究会でいま問題になっていきます。こういう特徴のあるものは気を付けろというのを情報として流しますと、もうその部分はずぐに訂正されて、次のものを作っています。

小田 なるほど。昔、密鑄により出回った天保通宝ですね。

川口 そうですね。

小田 それは、貨幣の作り方が稚拙だったために密鑄が行われて、どれが本物でどれが偽物かというのは、最後のほうには区別が付かなくなりましたが、いまお話しされた問題はそうではなくて、かなり精巧に作られている。

川口 そうです。だから、我々がいう偽物というのは、人を騙す目的で作られた物です。だから、明らかに貿易銀で二十〜三十万するものが大道で千円で売っているものを偽物と言いません。おもちゃです。

小田 これはどうですか（貿易銀を見せる）。

川口 これは違うでしょう。

小田 物が違いますか。これは違うんですか。

川口 これは違います。よく鑑定に持ち込まれるもので、縁日で買った貿易銀とか、一円銀貨で明治年号のものとか、何万円もするものを千円で買って来たとかよく言われるのですけれども、それは、我々は偽物ではなくて「おもちゃ」として扱っています。それは、先方も「おもちゃ」として、「あわよくば」というかたちで、例えば五百円で仕入れて千円で売っているという商品なのです。

それを買う側が、なまじっか中途半端な知識がある為に、これが本物だったら五万円十万円するものが、なぜ千円で売っているのかと、これは儲けものだと思って買って帰る。又、台湾なんかで千円で値切って買って来たものとか、もうそれは百パーセント「おもちゃ」的な偽物です。

小田 なるほど。

川口 第一、作り方が違います。近代のお金というのは、全部プレスで作っているのですけれども、全部それは鑄型に流し込んだお金で、だから、もう肌を見れば全然違います。

小田 台湾で作っているような貨幣が、商品が四枚五枚あれば、だいたい同じ特徴を持っているわけですね。

川口 同じ特徴というより、基本的に作りが違います。だから、我々の業界の鑑定委員会なんかにはそういうものは持ち込まれません。持ち込む以前に、業者さんサイドでふるい落とされます。やはり、鑑定委員会に持ち込まれるのは、買ったけれども、これはどうかはつきり分からないというものが持ち込まれるのです。

今までは鑑定委員会で全部対処できたのですけれども、最近鑑定委員会で対処できない物、そこまで精巧な物が出てきていますから、それは非常に困った問題です。

二・小判・丁銀の偽物

小田 鑑定委員会で相談してもそうなのですけれども、例えば、川口さんご自身が鑑定されるときに、いちばん最初に注意されるのは、まずどこを見られるのですか。

川口 物によります。例えば、小判で言いますとやはり極印です。小判の場合、上のほうに吾両という刻印、下の方に光次の花押というものがあ

れをまずいちばん最初に見ます。大判の場合は裏の榫目というのでしょうか。ざらざらつとしたそういうところを見ます。後は墨書き、そして極印です。それは、やはり「ざらつ」とした感じですよ。気持ち悪いなと思ったものは、後で鑑定に出したら、やはり八十パーセント駄目だということが多いです。

小田 これは偽物（人を騙す目的で造られた物）というのですか、商品（レプリカ）というのですか。

川口 いや、偽物です。

小田 やはり偽物ですか。

川口 やはり、何百万もするものですから、金の地金にしたら、それこそ同じ成分で作ってもいいわけですから、昔から作られているのです。

小田 だから、いま言われた榫目と花押ですね、墨書き、それから極印ですね。その辺、やはり今まで言われた三つ、三カ所あるのですが、三カ所とも納得しなければ、一カ所でもちよつと不審なところがあると、少し疑わざるをえない。

川口 そうですね。特に、大判とか小判とか、大きいものは一人では鑑定しません。買う場合でも、一人の目で見て鑑定しても、もし偽物となれば、五百万円で買ったとしても



小田 忠

口ですから、そんな危険なことではできませんので、やはり、何人かその場にいる目の利く人、やはり業者といえども専門分野があり、専門分野はおのこの違いから、そういう人たちに聞いて、最低三人以上の目を通して買います。

そこで疑わしきものは買いません。偽物だとも言えませんので、お客さんに対して失礼のないようにやんわりとお断りして、もう一度よそで見ていただいたらどうかたちでお帰り願います。

小田 なるほど。今のお話は私にとっては新しい知見でした。三人で鑑定されて、それで納得いかないと購入されない。それはもちろんすべての貨幣に言えるというわけですね。価値ですが、小判の輝きとか、色づけとか、小判に光を当てますと退色しますので、小判が光を放たなくなると思っているのですけれども、その辺りの感触というのはどうでしょうか。

川口 ただ、色艶は一概に言えないのです。保存されていた場所、例えば湿気の多いところで保存された小判ですと当然くすんでいますから、「ねとつ」としたような感じでくすみますけれども、ちゃんとしたところ、蔵のところに寝ていたらやはり自然の輝きを持っています。金焼けたものが残っています。それは保存状態によって決まります。

結局、作りたての小判をそのまま残した場合と、実際に使われていて通用した小判を比較すると、やはり金ですから柔らかくてかなり摩擦もしていますし、そういうたような場合はテカテカになった物もある

ります。それでも、状態が悪いというだけで本物は本物、いくら綺麗な状態のもので偽物は偽物です。

そのところは、ちょっと口では言えません。だから、我々も今までそこに至るまで、かなりの犠牲と言いますが、偽物も買っています。やはり、昔から諸先輩から言われたのは「偽物を買って、初めて本物が分かる」と、「痛い目をしろ」と再三言われました。やはりその通りで、この歳になっても、うっかりして偽物を買う場合があります。

小田 私の認識では、例えば、両替屋さんの丁稚にはいい貨幣ばかりを見せる、いい貨幣ばかりを見せてその貨幣の顔を覚え込む。流通している貨幣の中にはおかしい貨幣もある。そのような場合にも貨幣の良し悪しを判断できるような教育だったと思いますが、川口さんが先輩から教えられたのは、そうではなくて、まず違うものを発見するということでしたね。偽物ではなくて、違うのだから、その違うものの特徴を頭に入れなさいということですね。

川口 そうですね。実際に偽物を買った後で、本物との違いを見比べて初めて領ける。痛い目をしているから頭も必死で覚え込もうとするのです。

やはり、人が売りに来ているものを横で見ているだけでは、いくら説明されても素通りしているわけですから頭に入りません。

小田 銀行で偽札が発見されるときがあります。かねがね思っているのですが、行員の方がお札に対して毎日触っておられると、その方は

一万円札の感触を、体で覚えておられると思うのです。一万円札の束の中に触って違和感のある札が出てくると、初めてそこで丹念に調べられるのだと思うのです。また、同僚の人に触ってもらって発見に至るのではないかなと思っています。どうでしょうか。

川口 そうではなくて、紙幣の場合、今の時代に出てきている偽物は、コンピュータ詐欺なのです。だから、自動販売機とか自動両替機に読みとりのデータが入っているわけです。結局、見た目は極端なことを言えば単なる紙でもいいのです。ただ、読みとりの項目をちゃんと入れていると通るのです。

以前に、印刷局の有名な先生が講演に来ていたときに、日本のお札は十何段階の印刷工程を経て、紙も楮・三椏紙の政府管理の所で作って、透かしはやはり政府の管理のもとに置かれていますから、要は、銀行員ではなくて一般の方は、手で触ってその感覚で本物の感覚というものがあるのです。それで、これがおかしいという紙は一切使っていない。

それと、工程が十何工程にわたっていますから、本物とそっくりに作るうと思つたら非常に経費がかかるのです。昔は自動両替機がなかったですからそれで済んだのです。だから、まず偽札を一万円札で百万円分作つたとして、経費が百万円かかるとなれば百枚使うまでに発見されます。そういう感覚だったのです。

小田 なるほどね。

川口 笑い話ですが、その話を聞いた二週間後、ある一部の方はご存

知かもしれませんが、銀行で一万円札の偽物が発見されて、百枚以上使われているのです。それを自動両替機で全部両替しているのです。

小田 見抜けなかったわけですね。

川口 見抜けないのです。その当時のお札が全部、コンピュータから読み込むデータ、発行性物質磁気などを全部クリアしているわけです。でも実際現物を行員が見ても一般の方が見ても、明らかに偽物なのです。なぜこんなちゃんなお金が機械は読みとれないのだろうと、そんなものなのです。コンピュータ自体非常に忠実なので、そのようにデータを入れてしまっているから、その後一万円札は何工程も、マイクロ文字を入れたり、赤外線管理できる夜光塗料を塗ったり、いまのお札はいろいろ工夫されていますけれども、そのデータを政府は公表しません。データを公表することによって、偽札を国ぐるみで作るところもあるわけですから。

小田 紙幣は、むしろ人間だったら分かるけれども、機械任せだから、機械詐欺。

川口 そうです。

小田 少数のお金でも騙すことができるけれども。

川口 機械を狙ったほうが大量にいけるでしょう。銀行で両替してくれと言つて銀行員の前に行く、そんな危険なことは、今はしないでしよう。読みとり機で、例えば両替機に十万円入れて千円札に両替してしまうほうが早いわけです。

小田 そうですね。

川口 お札の場合は最近の犯罪だということですが。昔の偽札騒ぎというのは、「コピー」したりきれいに手で書いたり、やはり銀行で何枚も出回らないうちに発見されているわけですね。今はそういうものではなくなってきたということです。昔の偽物もありますけれども、それはやはり、一枚一枚手書きですから幼稚なものです。他の貨幣と言われる硬貨よりも偽物ははつきりしています。精巧ではないのです。

小田 豆板銀、丁銀などの偽物はどうですか。

川口 ありますよ。丁銀なんかでも本当に「おもちゃ」的な代物、よく額なんかにはって、見るからに偽物的な物もあります。やはり、丁銀なんかでも、よく見かけるのは元禄です。元禄は値段が高いです。だから、元禄とか三ッ宝とか享保とか、そういう高い丁銀は、今まで偽物があります。それも明らかな偽物から、いつ作ったのか分からないというぐらい精巧な物もあります。豆板銀もそうです。

小田 そういうお仕事をしておられると、貨幣についての眼識、あるいはそういうものの鑑定能力は自然と備わってくるのはよく分かるのですけれども、一目見ておかしいと、雰囲気的におかしいと、そういうものはややちな商品だと思つたのですけれども、何かちょっとおかしところがあるが、おかしくないところもあるというような、未練が少しはわくのだけれども、まったく払拭もできないというような商品に遭遇されることがあると思うのです。

川口 そういうことは、多々あります。

小田 そういふときは、やはり先程のお話のように三人ぐらいで鑑定

されるわけですか。

川口 そうです。鑑定している場所には、あまり一人でやっているということはありませんから、共同で即売会とかイベントをします中で、そこで大体主だった人には見せます。担当者一人がそれを買ってしまった場合は、やはり責任問題になりますから非常に危ないです。

三. 近代金貨の鑄造（手変わり品の誕生）

小田 明治四年五月に新貨条例が制定され、その時に二十円、十円、五円、二円、一円金貨が鑄造されました。五種類の金貨に手変わり品はあるのですか。

川口 平成十七年（二〇〇五）十月から平成二十年（二〇〇八）まで一四回にわたり開催されました財務省放出金貨のオークションには三二六八三枚もの金貨が出品されました。われわれ業者ならびに収集家にとつてこれほど大量の金貨を見る機会は最初で最後であったと思います。私にとつて特に明治三年から発行された旧金貨（二十円、十円、五円、二円、一円）は大変な魅力でした。

なぜなら、明治新政府の製造したこれらの金貨は、技術も過渡期にあり、いろんな手変わり品が発見できそうな気がしたし、本物の金貨の特徴を頭にインプットさせられる唯一のチャンスだと思ったからです。

小田 手変わり品はありましたか。

明治3年旭日竜旧5円金貨



欠円補刻



カニの爪

川口 ありました、ありました！ いろんなものがありました。あまり専門的なことを言っても難しいので省きますが、明治三年に発行された旧五円金貨では、「カニの爪」「欠円」「欠円補刻」などがあります。

小田 「カニの爪」とはどういった状態のものですか。

川口 「カニの爪」は、竜の鱗に铸溜りのあるもので、三枚発見しました。一般の方から買った金貨の中に一枚あったことからいっても手

変わり品といえましょう。

小田 「欠円」とはどのようなものですか。

川口 「欠円」は「圓」の文字の口が「」になっている状態で、打刻を繰り返している間に刻印が目詰まりを起こしたものと考えられます。

小田 それでは「欠円補刻」はどういったものですか。

川口 「欠円補刻」は上記欠円の目詰まり部分を彫り直したもので、その部分が明らかに不自然な感じで深くなっているものです。

小田 金貨の鑑定で特に注意しておられる場所はどこでしょうか。

川口 非常に難しい質問ですね。これには、決め手がありません。龍図案が「ズルツ」（鮮明さが無い）とした感じで、表裏も含めて全体をルーペで見なければならぬ、つまり根気のいる作業だと思ってください。

小田 明治三年の一円銀貨は三十数種類に分類できると聞いていますが、金貨ではどれくらい分類できるのでしょうか。

川口 旧二円金貨では、竜図鱗の違い、錦の御旗の中の点の多少などの組み合わせで最低四種類に分類できることがわかりました。次の四つです。

「重ね鱗多点」「重ね鱗少点」「切り鱗多点」「切り鱗少点」。重ね鱗の特徴は、魚の鱗の形そのものですが、切り鱗の特徴は、鱗の一個ずつが独立して隆起している。また多点は、錦の御旗の田中の点の数が多く少点は少ない。

旧一円金貨は、今まで前期後期と二種類に分類していたのが、その中間、中期と呼ばれるものが、ごくわずかではあります。存在することがわかりました。区分は明治の「明」の字体にあつて、普通の明を「止明（トメメイ）」と呼び、「明」の日編の最後の筆順にあたる横一を月の左あたりまで跳ねている字を「跳明（ハネメイ）」と呼んでいます。「大日本」と「明治三年」の間にある「・」が上にあるか下にあるかによつて区分されています。従前、前期は「止明」で点が下にあるコイン。後期は「跳明」で点が上にあるコインを言います。最近、後期のコインの中で「止明」が出てきた。つまり「止明」で点が上にあるコインを中期と分けるようになりました。二円、一円そのほかの手変わりについては非常に専門的で説明が複雑なので又の機会に述べたいと思います。

最後に手変わり品とは、明治三年四月から、刻印を手直ししながら使用してきたためにできたコインで、複数枚最低三枚以上確認されたときに、「手変わり品」と言えるということをつけ加えておきます。

四、銭の偽物

小田 小判とか丁銀、豆板銀なら高価なのでわかりますが、普通だったら穴アキ銭なんかは作るだけ手間暇かけるわけですから採算に合わないだろうと僕は思つたのですけれども、そういう偽物はあまり無いのではないかと思つたのですけれども、やはりあるのですか、銭は。

川口 銭もあります。

小田 銭もあるのですか。

川口 例えば、鎌倉期以降の渡来銭があります。渡来銭というのは中国のお金が特に多いのですけれども、日本で売っていて今まで日本国内の常識ですと、一つが万円単位なのです。一つが何万円もするとか、日本人の感覚で1万円する、2万円する、5万円する、10万円する、そういうものは非常に慎重に見たわけです。向こうから入ってくるから怖々という感じで見たわけですが、当時、古文銭という形の変つたものがあります。魚の形をしたものとか刀の形をしたものとか、そういうものには非常に偽物が多いです。

最初はそういう物ばかり見ていたのですけれども、日本国内で小売り末端価格が三百円とか五百円で売っているものは、そういうものはないだろうという感じです。収集家の先生と言われる人たちも、今まで非常に安く入ってきたものだから喜んで買っていたわけです。ある日突然おかしいということになって、見たら偽物だったので。

日本人にとって三百円というのは安い金額ですけれども、中国の方にとっては三百円というのは非常に大きな価値があるのです。最近初めて知つただけでも、向こうでは、偽物として扱っていないのです。

例えば、紀元前のお金の偽物を作っていると、そうではなくて、これはうちのお祖父さんが作ったお金の作品。だからこの作品なんかも代々埋めているから、古色古錆のついた物とかあるわけです。青錆な

どもきつちりついているわけです。

日本人みたいな感覚で、今すぐに偽物を作って売るといった感覚ではないですから、その点もつ、物に対する意識のずれです。日本の物価で物事を判断してはいけません。だから、今後百円、二百円で売っているものも注意しなければなりません。

いちばん気を付けてなければいけないのは、今後、ナマ知識で安いからといって買うのはまず危険を伴う。これをまず基本的には頭に入れたらほうがいいと思います。昔から、妖精のごとき綺麗な人には刺があるとか、きれいな薔薇には刺があるというのと一緒で、お金にも、やはりどこかに罠がありますから、十分に注意されることだと思います。

小田 そういう意味では、購入される方は、やはり適正価格を知るところです。

川口 そうですね。

小田 あまりおかしな気を出して、これで儲けてやろうとか、そういうことは考えないほうがいいですね。

川口 業界としても、これが偽物ですよといったものを一般の即売会に出さないのです。というのは、基本的に組合が主催している多くの即売会などでは、一切そういうものを出さず、ややこしいものを出すなど、やはりいい物を出せというのが鉄則ですから、一般の方は、悪い物を購入したり、悪いものを見る機会があったときには、自分がもう被害を被っているということですか。

五. 購入ミス

小田 今は貨幣についての鑑定や診断の問題をお聞きしたのですが、従前川口さんが扱っておられたお札もあるだろうし、他にも商品券のたぐいや看板なんかもあるでしょう。こういうことをお聞きするのは非常に失礼かと思うのですが、何か今までで、とんでもない誤りとかいったご経験があるうかと思うのですが、何か、鑑定をミスをしたこと、そこらへんを一つ、二つお話していただけますか。

川口 ミスしたことです。

小田 はい。

川口 ミスしたというと、大きいのでは丁銀と豆板銀を以前に三本買ったのです。三本で六百五十万円ぐらいで買いました。もちろん、僕もいいと思って買ったし、勧める人もやはりちゃんとした人だったので信用して買って、次の大きなイベントに出したら、鑑定が通らず、結局、疑わしきは自分の商品に「けち」が付きますから、真贋を出す前にお蔵にしました。一本は本物でしたので売れました。六百五十万もの値打ちの元を取れたのは百万ぐらいです。後はお蔵入りです。

小田 それは、やはり今見られてもおかしいわけですか。

川口 おかしく思わないです。

小田 おかしく思わないのですか。

川口 はい、思わないです。意見が分かれています。

小田 ああ、意見が分かれたから、もう出さないということですか。

六・補修

川口 そうです。それと、怖いのは近代紙幣で綺麗な物でも、紙幣の場合、偽物というよりも修正が怖いのです。

小田 修正ですか。

川口 紙ですから非常に傷みやすいものですから、表面がはげたり傷んだりするわけです。それを同じ紙幣の紙を持って来て、うまく精巧に補修していたわけです。補修がうまくいけば、状態がいいもので通りかねないです。普通の補修品として売られた場合、非常に安いです。現物を見ても補修を施してあるかどうかは本当にわからないです。

小田 精巧な補修ということですか。補修してあるかどうか分からないわけですか。

川口 数年前、神功皇后一円札の未使用を買ったわけです。買ってすぐにある方に売ったのです。その人からクレームが来ました。これは補修だと。仕入れた店も一流の店ですから「嘘だろう」と、ピンとしているし、そんなはずはないと見て、感情の絡まない第三者に見てもらったら、やはり補修だということでした。やはり、ルーペで覗いてよく見ると、線の模様が微妙なところで歪んでいるのです。縁のこういった線があるでしょう。これは真っ直ぐでないといけないのに、ちよっと歪になっているのです。やはり、別の紙を持って来ているのですね。

小田 紙の目というものがありませんね。その目が揃っていなかったと

いうことですね。その方は、自分で見られたわけですね。

川口 そうです。結局、その方は一週間か二週間前にそういう補修品を買って痛い目に遭っているから、それで、やはり慎重に見られてそれでわかったのです。

小田 なるほど。

川口 もう、即返品になりました。

小田 川口さんは買ったところに持って行かれたのですね。

川口 もう、説明して本人は納得できなかったけれども、やはりよく見たらやはりそうだということになって返品というかたちになりました。

小田 難しいものですね。

川口 だから、テレビに映っているような江戸時代の偽金作りとか、小判が偽物だとかそういう世界ではないのです。当然、その時代に偽物はあるのでしょうけれども、たいがい今出回っているのはオークションに明治以降に、いやに大正以降に出回った物でしょうね。

小田 大正以降ですか。

川口 だから合理的です。趣味の世界としてプレミアが付き出したときからです。

小田 自分の腕を試してみようと。

川口 試してみようではなくて、騙すものとして、こんなに高く売れるのだったら、おれの技術で作れるのではないかということで、最初騙してやろうというものが多いです。

小田 そういふ人は、偽金を作るといふ認識はあまり頭の中にないのですか。

川口 あるでしょう。

小田 あることはあるんですね。

川口 最初から騙す目的で作っている。

小田 そういふ人たちはプレミアが付きだした大正以降から、そういったものを造り出回るようになったわけですね。

川口 大正以降でも、末期、特に昭和以降でしょう。

小田 どういふ風な視点で見られておられるんですか

川口 貨幣の姿全体を眺めるんですね。全体を、細かいことはあまり見ないのですよ。極印とか、全体を見てね、こんなものかというような感じで、もちろん個々の偽物とかそういう見方ではなくてこういうものかと、この時代の貨幣はこういうものかという感じで眺めているのです。

七・渡来銭

川口 小田さんご存知の世界で、例えば江戸時代の貨幣でも渡来銭の世界でも、鑄銭^{ひた}ってありますね。あれは収集会では、ちゃんとした収集品なのです。当時は偽金と言えば偽金なのだけでも、それは実際に通用していたお金なので、偽物ではなく、それは鑄銭として収集会で通っているわけです。

小田 現実に店頭でも即売会会場でも並んでいますね。

川口 並んでいます。それと、悪意があつて、つくられた小判などは違うものです。

小田 なるほど。そうすると銭、貨幣の流通は盛んになりましたけれども、中世の頃は流通していたけれども、近世に入ると流通しなくなります。だから、逆に言うと、中世以前の偽金（偽銭）というのは、偽銭とは言えないのでしょうか。職人の技術は高いですから作れないことはないですね。

川口 特に、江戸時代なんかはいくら幕府がしっかりしていても、日本の隅々までお金が流通したわけではなく、今の銀行みたいに両替商が発展しているわけではない。鑄銭は鑄銭として大都市では十分通っていたわけです。さっき言ったような鑄銭というのは、それは、やはり取り引きされていたわけです。やはり、時の幕府の発行していた銭がまだまだ不足していたということではないでしょうか。

当時の偽金、鑄銭的なものと、いま我々が言う偽物というものは全然種類が違います。

テレビでよく出てくる江戸時代の小判などの贋金づくりは、ばれると打ち首、獄門になります。これは非常に厳しい罪ですから、お金の贋金づくりは重罪だから、小判ばかりではなかったと思いますけれども、二分金も大きなお金ですから、当然偽物なんかあったと思えます。それは物語面白くなって、小判のほうがおもしろいから、そればかり取りざたされます。

大阪商業大学の資料館（現、大阪商業大学商業史博物館）に置いておられる看板類とか道具類は、昔おさめさせていただいたもの、やはり道具屋さんで真贋を教えてもらうでしょう。こういう場合は気を付けて。教えてもらうと、やはりそういうふうに分かります。だから、本物は高いから偽物が非常に多いと思います。

小田 いい物は高いですね。

川口 よく見ると、やはり、その当時の物に似せるように焼いてみたりに金具を付けてみたり、そこで、ひよつとしたらつまらないところで引っ掛かる。

八、人には親切にすべし

小田 偽物の話ばかりしましたけれども、いい物に出会ったときの嬉しさとというのはどうでしょうか。悪い話ばかりしましたので、今度はいい物に出会ったときの話をさせていただきます。

川口 どこにいいものが眠っているかは分かりません。我々の扱っている貨幣というのは、いま偽物は作もありますが、本物というのは今までに残っていたものを探す。どこにいいものが眠っているか分からないです。一般の方が、デパートで鑑定場を設けてお持ちになった場合もあれば、全然そうでない場合もあります。

面白い話をしますと、ある女性の方が持ってこられて、現行コイン今で言う五十円玉、古い五十円玉とかをお持ちになったのですが、あ

まりにも気の毒だったから、このお金でも年号によって少ないものがありますから、と言って私が選んであげたのです。たまたま親切にしたわけです。どんどんお金を出して行って、その下から和紙に包まれたものが出てきた。見たら江戸時代の珍しい銭や二分金、一分金など非常に高価な物なのです。それまで、これが五十円、六十円とか、五十五円とか値付けしていたのに、急にこれ一枚で一万円とか、これは五千円とか値段を提示されるのでびっくりして真剣になり出して、いちばん最後に全部箱から出したら大判金が出て来ました。江戸時代最後の万延大判金で、高いものなので、「奥さん、これ二百五十万で買えますよ」と言つとびっくりされていました。

小田 それはそうですね。

川口 やはり、人には親切にしておくべきだなと。それは、これは全部駄目ですよとお断りしてしまっていたら、それはまたお蔵になって世に出て来ていなかった。そういう場合もあります。そういうときは嬉しいですね。

小田 なるほど。やはり、それを発見されて購入される、仕入れる川口さんのほうも、予想もしていなかった値が付いて、それが売れたお客さんも嬉しい。両方相まつての話ですね。他には、いいお話はありますか。

川口 あまりないですね。

小田 今の件は、いつごろのお話ですか。

川口 もう十五年ぐらい前です。去年、一昨年あたりに、私がたまた

ま在宅していた時田舎のほうが来られて、こんな金貨が出てきたと言われて、どうせ眉唾だろうと思ってみたら全部本物で、旧十円金貨から一円まで十五枚ぐらい持って来られたことがあります。

そのときに、ちょうど財務省の払い下げのある事を聞いたものですが、その当時はちょっと値段が下がっていたのですが、一応ギリギリの値段で買ったのです。喜んで帰られたのですけれども一週間くらいしてから全部、商品をルーペでのぞいていると、一枚だけ財務省オークションで一枚しか出てきていなかった特殊な金貨が出てきました。それは、僕が特殊な金貨と言っているだけで、一般にはまだ認められていません（手変わり品のこと）。

小田 なるほど。

川口 これは非常に少ないし、状態もいい素晴らしいものでした。

小田 それはどういった経緯で、そういう特殊な金貨が生まれたのですか。

川口 やはり、刻印の目詰まりでしょう。金貨の極印というのは手彫りですから、どんどん摩耗するわけです。金属片が詰まってくるわけです。詰まってきたり彫り間違えたりして、今みたいにコンピュータで極印を作っているわけではないですから、一人一人の職人が手で彫っているわけです。ミスして彫り間違えたりすることがあるわけです。そういうものが一枚だったら手変わりにならないのですけれども、複数枚と、三枚、四枚見つかったら、やはり違った手変わり品として認められるわけです。

小田 それは、エラー硬貨ではないわけですか。

川口 エラー硬貨ではないです。特に、私自身が手変わり品という金貨を収集している最中だったから、嬉しかったですね。

小田 なるほど。川口さんは鑑定されるときにルーペを覗いておられますけれども、ルーペを覗かれて、極印の流れとか、それを隅々まで見ておられるわけですね。自分で所有しておられる硬貨類も。

川口 そうですね。

小田 そこまで見ないと、分かったことにはならないわけですね。

川口 そうですね。この二年ほどあった財務省の金貨の払い下げが三万何千枚あったわけですけども、しかし、私はやはり自分で金貨を見たい。できるだけ東京に行って「交通費もかけて何をしているんや」と笑われましたけれども、逆に言うところ見るチャンスですから、これだけの枚数を一挙に見られる機会はないわけです。最初は分からなかった特徴、これはちょっと違うということが、やはりだんだん分かってくる。凶案模様など、数を見ないと駄目です。

小田 やはり、最終的にはそうですね。数を見ないと駄目ですね。だから、江戸時代の両替商が丁稚達に毎日、毎日貨幣を見させる。もちろんいい貨幣だけを見させるのですけれども、そこで種類を自然に覚えさせていくのですね。いい貨幣、悪い貨幣の量的にも、一応この辺の範疇だということですね。それを意識して、それができない連中は駄目な連中ですね。

川口 そう思いますよ。

小田 鑑定能力が身に付かないですからね。

川口 理屈だけではだめですね。やはり、数を見ないと。

小田 そうですね。大学教員で鑑定するという人がいますが、その人は現物をどれだけ見られたのか知らないですけれども、あまり信用していないのです。知識だけで解決するとは思えないし、ものをたくさん見ておられる人は信用します。もう商売で見ておられる人は、それは職業ですから目も肥えています。そういう人の意見は尊重しますけれども、実際物を見ないで、ちょっとしか見ていないのにえらそうなことを言っている人がいるのです。それを僕はあまり信用していません。

川口 本だけで聞きかじる人ですね。

小田 貨幣も現物も、いくら見てもこれでいいということはないですね。

川口 ないですね。

小田 同じようなものは、本当に出てこないですからね。

川口 何年経っても新しい発見というのはあります。こんなところがあつたのだというようなことです。

小田 それはもう、長い間ルーペを覗き、色々な物を当たっている、貨幣を数多く見ておられるから、そついつ新たな発見があるわけでしょうね。

川口 我々は、やはり物をたくさん見られるのは有難いです。嬉しいことです。

小田さんのところの大学でもコンピュータで管理しておられて、種々の貨幣をお持ちでしょう、それを元にして日本のお金の楽しみ方とか、近世のお金の話をされたらどうでしょうか。

小田 そうですね。最近、知識だけの世界など、僕は面白くないです。体験を通しての、そういう世界を知っておられる方の話を聞くようにしているのです。説得力がありますし、それを見てどういふふうに考えてこられたのか、それは説得力が高いです。

川口 お金の歴史とかですね。前に僕は、頼まれて、経済クラブがあるでしょう。あそこの経済同好会、やはり商業自体の話とか、精神論というような教育的な話ばかり、説教じみた話ばかりだったので。

そのときに会員の方からお金の話をしてくれと頼まれました。全然皆さんにとっては知らない世界の話だから、興味を持ってもらえませんでした。

小田 それはやはり、私たちも本でも、江戸時代の貨幣でも、江戸時代の両替屋の仕事も結構広いですから、一般の方はご存じないだけで、これだけかと思っておられるだけで、実はそうではなくて、その中の広がっている世界はすごい世界です。

*偽物、贋造品とは、美術品として販売するため後世に作られたもの。その貨幣使用当時に通用を目的として作られた「贋金」とは区別している。「おもちゃ」は、騙す目的ではなく、楽しみで作られた玩賞品であり、偽物の判断もされない程度のものをいう。

